

CENTER NEWS

2009. NO.274

5,6
合併



協同組合 関西地盤環境研究センター

表紙説明

当センター所長の中山 義久です。今月号から土木・建築に関わる構造物の写真をお送り致します。

2枚の写真は京都府八幡市と久御山町を結ぶ府道八幡城陽線上津屋橋(こうづやばし)で、通称「流れ橋」と呼ばれております。生活圏に木製の橋があることは土木を志したものに限らず、眺めているだけで何かしら心安らぐ気がします。

『全長は356m、幅3m、木橋としては日本最長級である。増水時の水の抵抗を減らすため、橋板にまで水が達すると橋板だけがフワッと浮き上がり、8つに分かれて流れる。流れ橋の名のゆえんである。しかし、この橋板はワイヤーロープで橋脚としっかり結ばれているため、水が引けば、このロープをたぐり寄せて橋脚に載せれば、再び通行できるようになる。』参考文献より引用。

<今月号の写真コメント>

上段：朝焼けに映える木製橋の橋脚。

下段：夜明けを迎える木製橋の全景。

《参考文献》 http://www.kankou-yawata.org/article.php/historic_spot7
(2009.05.20 取得)

目次

ごあいさつ --30周年を控え新たな出発-- 佐藤 和志	1
4月定例理事会	4
4月主な会議・会合・行事	5
4月受注・完了(月別・推移)計画対比グラフ	6
組合員技術者紹介コーナー(第61回) 久木 英一	7
守口移転物語 第7回 基礎工事からみた地盤特性	10
第1回 ケータイフォトコンテスト 結果発表	11
第2回 ケータイフォトコンテスト 作品募集	12
このご時世ですから 土橋 香里	13
お知らせ	14
編集後記	15



ごあいさつ ---30周年を控え、新たな出発---

協同組合 関西地盤環境研究センター

専務理事 佐藤 和志

まったく異次元の教育界に飛び込み、新たな発見や楽しさを堪能して、4年の任期を最大限に活用し元気な若者を世に送り出す仕組みを作り、フレッシュな若者のエネルギーを吸収して戻ってきました。平成16年11月までは、当組合の理事をやらせてもらっていましたが、分かっておられる方々、またなに者？と思われる方々、どちら様にも前任の澤・井上両専務理事同様によりしくお願い申し上げます。

世の中、いつの時代も変化は付きものですが、ここ数年、特にこの半年の変化は劇的ともいえるものです。この期間に業界を離れていたもので、かなりの浦島太郎状態であることは否めません。しかし変化はまたチャンスでもあり、これをチャンスにするには、新たな発想や別の視点からの見方が必要になります。その意味でお役に立てるのではと思い、この大役を引き受けることにしました。

5年前の新たな出発は、あまりに突然で、自分にとっても想定外の出来事だったので、組合の皆様方をはじめとする、お世話になった方々に多くの迷惑をお掛けしての転身でした。想像すらできなかった公立高校（八戸工業高校）の校長をやることになったのは、『最近の若者はとにかく元気がない、覇気が無くて面白くない』『何でだろう、どうにか為らないものだろうか？』と考えていたことがキッカケです。偶々、ふるさと青森県での民間人校長の公募を知り、『若者と直接話がしたい』『これまでの自分の経験が教育界に通用するのかを試してみたい』などと思って、気楽に受験をしたら現実になっていたのです。

教育界での経験をひと言でいうと、『大変なことも多いけどそれ以上にやり甲斐のあるところ』でした。印象的には、「生徒が生き活きと輝いている、一方で忙し過ぎる先生が個々に働いている」そして「行動の基本が書類(制度)・前例になっていて、主役である生徒が中心になっていない」不思議な組織でした。赴任前には、教育界に素人が入ってやるべきことは“これまで”に囚われず“これから”のために新たな展望を開くことであると考えていたのですが、その通り進めて良いことを確認できた思いがしました。また、学校現場の印象は、『若者の本質は変わっていないけど、大人た

ちが社会の変化に追いついていない。学校すなわち先生が変われば生徒は大きく飛躍できる』との実感です。さっそく、建コン業界で培った“自分らしさ”を前面に、できることから理解してくれる先生たちと実践しました。その結果は、生徒や卒業生が社会活動の中で出してくれていると思っています。

私にとって 38 年振りの“ふるさと青森”は、豊かな自然・メリハリの利いた春夏秋冬・溢れる人情など、人間らしく生きる条件がそろっている素晴らしいところでした。心が洗われ、忙しすぎる日常で失いかけていたものを取り戻すことができた思いがします。八戸や青森県の人には、「自然との共生で生まれた、自然の恵みへの感謝」や「忘れる間もなく起こる地震や台風の災害によって生まれた自然を畏敬する謙虚さ」などの日本人らしさを代表する感性が、まだ失われていない思いを持ちました。1922 年にアインシュタインが見た素晴らしい日本、あるいは世界の喜劇王チャップリンが愛した日本の風土・文化が、最も残っている地域の一つであることを再発見できました。そこで生まれた生徒たちは、純真で素直な若者が多く、地域と日本の未来に一筋の光明を見た思いです。

現在の経済危機は、百年に一度などと騒がれていますが、金融工学といわれるバーチャルな経済、異常な金融バブルが弾けたものです。この背景には、先進諸国が利便さを求めて、高度な知識や豊かな物を得ることに腐心するあまり、心の均衡が崩れて社会問題化していることも大きく影響しています。これからは、実態を伴った「生産（ものづくり）」と「環境（自然の一員としての人間）」が再評価されることとなります。技術立国日本の真価が発揮できる時代になるのです。したがって、生産活動を主な業務としている建設関連の業界も真価が問われることとなります。危機を乗り越えるには、個人及び企業が、自信と誇りの持てる仕事を推進する、あるいは仕事に自身と誇りを持って邁進することが重要であると考えます。

最近のある統計によると、「会社の寿命 30 年説」はいまも健在といえるようで、その実態は「本当に生きが良いのは最初の 10 年」、「元気な優良企業でいられるのは 30 年まで」ということらしいです。そして優良企業となりうる条件の一つに、「小粒でも活きの良いまま 30 年」があります。これをベースに、その力を維持していくための変革および規模拡大の継続が、優良企業としての地位を確実なものにしているということです。

その一方で、「日本は、江戸時代以前から続いている老舗が世界で一番多い」というデータもあります。それによると、日本には 100 年を超える歴史を持つ会社が

1万5000社以上あり、江戸時代以前の創業に絞っても約2100社あるとのこと。ヨーロッパの数百に較べても特に多い実態です。これらの企業がどのようにして100年以上も生き延び、現在も発展し続けているのかを調査した結果によると、多くの経営者が、「強いものではなく、環境にもっとも適したものが生き残る」とのダーウインの進化論を引き合いに出していることが興味深く、示唆を与えてくれます。

当組合も、来年度は創立30周年の節目の年を迎えますが、市場環境を筆頭に大きな転換期にあります。幸いなことに、これまでの皆様方の絶大なるご協力のお陰で、まだ鮮度を保っています。優良企業になる条件の一つはどうかクリアしていると思われる今、次の30年に向けて重要なことは、環境に適応して生き延びることに一丸となり、維持・発展を期すことです。その第一歩は基本に立ち返り、『本組合は、組合員の相互扶助の精神に基づき、組合員のために必要な共同事業を行い、もって組合員の自主的な経済活動を促進し、かつ、その経済的地位の向上を図ることを目的とする』とある設立当時からの目的に戻って発想することです。また、環境に適応することは「三方良し」の達成、つまり「組合企業良し・職員良し・社会良し」を目指すことが重要な指標の一つになります。

新たな年も、高村理事長の下に役職員が一丸となった組織を確立して、“品質・価格・経営の維持向上”さらに“活動の源である業界人材の活性化”をキーワードに、『業界の底力』を目指して皆様方のお役に立つように努めたいと思っています。自社と組合そして社会のために、より一層のご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

組合員技術者紹介コーナー（第 61 回）



所 属：株式会社 中堀ソイルコーナー
氏 名：久木 英一
生年月日：1960年12月30日
出 身 地：大阪府

中堀ソイルコーナーの久木と申します。弊社は賛助会員ですが、ハザードマップ研究会に所属しているご縁もあり、同研究会分科会の席上にて、基礎地盤コンサルタントの熊岡さんより執筆依頼を受けました。簡単ですが、自己紹介、雑談などを書かせて頂きます。

【自己紹介】

生まれも育ちも大阪で、現在では新型インフルエンザで一躍有名になった寝屋川市内に生息しています。前回執筆の熊岡さんが名前のお話をされていますので、それに便乗させて頂きます。

私の名前は「ひさきひでいち」と読みます。簡単な漢字なのですが初対面の方で私の名前を正しく読めた人は一人もいません。普通は「くきえいいち」もしくは「くきひでかず」と読むとおもいますが、この名前を付けたのは私の祖父であり、小唄の名取まで取った所謂遊び人で、演芸場の舞台上でトリを勤めることもあったようです。何故こんな読み方にしたのか問いただす前に亡くなってしまいましたので、真相はいまだ藪の中です。

若かりし頃、この読み方を非常に気にしていたのですが、最近では会社にかかってくる電話で、私の氏名を間違えている場合は勧誘電話なのがほぼ確定的と判断できますから、案外便利な名前かもしれないと思い始めています。

【新世界】

ドボルザークの名曲のことではありません。通天閣下のあの境界のことです。小唄のお師匠さんの稽古場兼自宅が今で言う春日通り沿いにありましたので、祖父がよく通っていた所です。今でも、お師匠さんの顔や稽古場、当時の春日通りから新世界本通、ジャンジャン横町の情景を鮮明に覚えていますので、相当な回数連れて

行かれたように思いますが、幼稚園～小学校低学年当時の私を頻繁に連れ出した祖父の意図も今となっては不明です。一番鮮明に覚えているのが、新世界国際地下劇場のいかがわしい映画の看板であるのは、悲しい男の性でしょうか？

当時の新世界界限では、平日の真っ昼間でも結構人通りがあり碁会所などはほぼ満席で、劇場・映画館なども結構賑わっているようでした。劇場がある関係なのか和服姿の人が多く、侍姿の役者さんが歩いている姿も時折見かけ、太陽が照りつける中、道端に酔っぱらいが寝ているという光景も私には当たり前でした。そういうわけで、後に「あそこは危険な場所だから行かないように」と言われても全く理解できなかったのです。今の新世界は随分変わってしまって、お師匠さんの家も既に無く、ご存命されていればもう 100 歳は越えておられることでしょう。「昭和」と聞くと、当時のあの界限の情景が思い出されます。

【できないこと】

【自己紹介】で話の出た新型インフルエンザですが、水際での防止作戦がうまく行くとはい到底思えません。国は必死になって感染防止活動を展開していますが、この問題に限らず、実現がほぼ不可能と思えることを安易に宣言するのはいい加減止められないものでしょうか？

日本では「絶対に～しない」とか「二度と～しない」とかいう妄言をよく耳にします。私が所属するハザードマップ研究会に関連する問題では、国土交通省が「中長期的な展望に立った土砂災害対策に関する提言」をまとめていますが、その副題が「死者ゼロの実現を目指して」になっています。どれだけ対策を施しても事故の可能性は残りますし、「死者ゼロの実現」する可能性こそゼロだと思えます。この問題は、このような宣言をする側だけでなく、なんらかの事故が発生した場合、そのような言質を取ることに躍起になっているマスコミなどにも責があると言えるでしょう。実現の可能性が皆無に近い無意味なお題目の遣り取りをするよりも、事故の可能性は決してゼロにはならないこと、死者が出る可能性は常に残ることなどを役人・国民等の共通認識として確立させた上で、各種の防止活動・災害対策等を展開するべきでしょう。災害活動で問題となる「逃げない人」の遠因の一つがここにあるように思えます。

【全体と部分】

最近、国や地方公共団体が発注する地質調査では、報告書に推奨する設計用物性値まで記載するように求めるものが多くなっています。それ自体には問題はなく、むしろ実際に調査・試験を行った当事者が設計用物性値の評価まで行う方が好ましいと言えるでしょう。問題は発注の形態にあり、大きな現場では幾つかの区域に分け、区域毎に別業者に発注されることがほとんどで、極端な場合にはボーリング1孔で1業者というケースもあります。複数年度に跨った調査であれば前年度の調査結果を参照できますが、単年度に全部の調査を発注した場合、請け負った業者さんは、基本的に自分たちが担当した区域のデータしか評価できません。つまり、現場を細かく区切った部分毎の評価は行われますが、現場全体を評価する視点が全く欠けていることとなります。

最近、私が経験した現場の調査もこのような形態で行われており、各区域毎の設計用物性値には、ほとんどの場合、請負業者さんの設定した値がそのまま使われていました。偶々、工期変更の為、安定・沈下計算をやり直す必要に迫られその仕事が弊社に舞い込んだのですが、調査データを一式頂いてグラフに整理してみると、他の地域に比べ1地点だけ飛び抜けて大きい強度を示すデータが目につきました。柱状図を調べてみるとモンケン自沈と表記されているにもかかわらず 100kN/m^2 の強度がありますし、圧密試験結果では深度1m程度にもかかわらず、 P_c が 1000kN/m^2 で、 $4000\sim 10000\text{kN/m}^2$ の応力範囲で間隙比が2以上もあり、 C_c が1.5もある異常なデータです。また、他の圧密試験結果に比べ、データの存在する範囲が一桁分右にずれています。後に、応力の単位換算を1桁間違えていたことが判明し、強度が1/10に下がったため、大幅な工法変更を余儀なくされることになりました。単純なミスが原因ですが、全調査データをまとめて評価していれば、容易に気がついた問題を見過ごしたケースです。

次回の執筆者にはハザードマップ研究会で同じ分科会に所属している関西地質調査事務所の今西さんを紹介させて頂きます。宜しくお願い致します。

守口移転物語 第7回

基礎工事からみた地盤特性(C棟建設の杭基礎工事の結果より)

守口移転物語第4回と5回でセンター敷地に厚く堆積している沖積粘土の特性が指摘され、さらに地質調査・土質調査からも鋭敏比が高く、練り返すと泥状を呈することが明らかになっております。

今回は実際の基礎工事から分かったそれらの土質特性を報告いたします。

鋭敏粘土の観察と性状確認

弊センターのGL-5m～16mの厚い粘土層は一軸圧縮強度が小さく、かつ鋭敏比が大きいたことが分かっています。実際、杭施工中に排土された粘土がどんな状況であったか、さらにどう処理されたかを以下に写真で示します。

写真-1は試験杭として施工された時、オーガー掘削で発生した粘土の様子です。この写真から分かるように、掘削により十分練り返され、かつ鋭敏比が高いこともあり、かなり軟弱化している状態が見て取れます。

同様に写真-2は同一杭のもので、写真に見える節杭の廻りの粘土も土質調査で予想されたようにドロドロに近い様子が伺えます。

排土された粘土は、写真-3に示されるようセメント系固化材により低含水比状態に改良の上、産業廃棄物として、適切に処理されました。



写真-1 GL-14m 付近の排土



写真-2 排土全体の様子



写真-3 固化処理後の排土

第1回 グータイフホコンテスト 結果発表

今回のテーマは「春」でした。

みなさんの力作（全12作品）は、厳正な審査をおこないましたので発表いたします。



1位「春のトンネル」
ペンネーム：蒼（あお）



2位「新幹線公園の春」
ペンネーム：カメラ親父



3位「一本桜」
ペンネーム：ベチコ

4位(同率)「山桜」, 「クロタキ桜」

6位(同率)「我が家の春」, 「春は曙…まだ眠い」

8位(同率)「春告草」, 「お茶の時間」, 「ひなたぼっこ」

11位(同率)「ぼかぼか」, 「春の交通安全運動」

入選された方、おめでとうございます。

次回も力作をお待ちしております。

第2回 ケータイフォトコンテスト テーマ“夏”

仕事場や旅先での一コマ，プライベートでの出来事，メッセージを伝えるワンショット等など，ケータイフォトに粋な題名を添えて応募してみませんか？

センターニュースでは，組合員の皆さんが携帯電話で撮影した写真を募集し，フォトコンテストを開催しております。

今回も機材の性能や技術の差が出にくいケータイフォト限定なので，素人の方でも入選が狙えます。なお，入選者には豪華賞品？を用意していますので，奮ってご応募ください。

[応募方法]

携帯電話で撮影した写真データに下記の事項を必ず書き添えて、メール「E-mail：jyoho@ks-dositu.or.jp」にてご送信ください（お一人様の作品は1点にてお願いします）。

- ① 題 名
- ② 撮影した組合員の会社名と所属
- ③ 撮影者氏名（ペンネーム可）
- ④ 連 絡 先



こちらの QR コードからも
申込できます

[〆切]

平成 21 年 8 月 10 日（月曜日）午後 5 時迄 です。

[注意事項]

ご応募頂いた写真は HP でも公開することがありますので予めご了承ください。また，人物・美術品・写真等，著作物もしくは肖像を作品に使用する場合は，予め著作者や被写体の方などから事前の使用許諾・認証を得た上でご応募ください。



このご時世ですから

協同組合 関西地盤環境研究センター
環境技術課 土橋 香里

四月に無事、センターに入社しました土橋香里と申します。

この不況なご時世に晴れて社会人になれまして、しかも環境分析という憧れの職種に就け、多少浮かれております。しかし今、身が引き締まる思いでこの原稿を書いております。

さて、世間は今、百年に一度と言われていていますアメリカのリーマンブラザーズを始めとした世界恐慌が起こっています。一年前の今頃は景気が良いと言われていたのがいっきに不況になり、当時就職活動をしていました私はとても焦りました。新聞やニュースを見ると内定者の内定取り消しや、人件費カットの問題、政治家達の歩み寄りのない言い争いでした。こんな事ばかりでこの先就職できるのか、景気は回復するのか、私たちの老後はどうなるのか、学校の友人達との話題は暗い話でした。家では最近母がよく「バブルの時に戻りたいわー」と嘆いています。私もです。私はバブル時代の記憶が残っていません。ソバージュ、ジュリアナ、高級車、海外旅行もバンバン行けたという、今ではあり得ないことだらけです。私もタクシーに乗って「お釣りはいりません」とか言ってみたいものです。今からバブルにでもなってくれないかと願うばかりです。

最近見たテレビ番組で、今の若者は「夢」がない人が多く活気が無いと言っていました。いろんな方が議論していくなかで、ゆとり教育でのんびりしたせい、インターネットの普及のせい、海外の色々な人と触れ合う機会を持たないせい、結婚離れだとか。確かにそうかもしれませんが、こんな先の見えない大不況で政治も安定しない、老後の年金は貰えるかなど今の若者は不安だらけです。そこで「夢」は何ですか？と聞いて期待された答えはかえってくるのでしょうか。そんなに無いと思います。

暗い話はこの辺で、まだセンターに入って間もないですが、周りの先輩方には優しく、至れり尽くせりして頂き、気持ち良く仕事をさせてもらっております。個性豊かな方が多く笑顔がたくさんある職場だと印象を受けました。ここで頑張っていこうと決めたからには資格をいっぱい取得して上りつめていこうと思いますので、どうか皆様の温かい目で見守っていて下さい。

最後に私の今の夢ですが、地上デジタル対応の液晶テレビ、低燃費のエコカー、My パソコンを購入することです。言わば、貯金二百万円する事です。

お知らせ

☆ 平成 21 年度特別技術講演会

- ・日時：平成 21 年 7 月 22 日（水）14 時 00 分から
- 場所：ラマダホテル 大阪
大阪市北区豊崎 3 丁目 16 番 19 号
TEL 06-6372-8181 FAX 06-6372-8101

講演会テーマ「土壌汚染対策法改正による今後の地質調査業のありかた」

講師： 畑 明朗 先生（大阪市立大学大学院 特任教授）
姜 永根 先生（株式会社淡海環境デザイン 代表取締役）
上砂 正一 先生（NPO法人 日本地質汚染審査機構 理事）

上記、3名の先生方に講演をお願いしております。

講演内容などの詳細につきましては、センターニュース 7 月号に掲載およびホームページの新着情報にてお知らせ致します。

編集後記

先日、電車の中での1シーンですが、年輩のご婦人が筆ペンでハガキのようなものに字をしたためているのに出くわしました。揺れている車内で、短文をスラスラと縦書きされているのを拝見しながら思いました。最近のITばやりでパソコン相手に文章を綴ることが多くなり、自筆は随分と少なくなった(無くなった)ことを改めて自覚するとともに、揺れる車中で消しゴム不用の書下し(かきくだし)で文章を綴ることの偉大さを実感しました。

パソコンゲームに慣れ親しんだ子供は、いとも簡単に全てをリセットします。リセットできない一発勝負(ご婦人にとってはそれ程でもないのかもしれませんが)の世界は、人間形成に極めて重要であることを再認識する時期ではないでしょうか。しかしながらそのための身近な行動が見つかりません。そんなときに出くわしたこの光景に深く感銘した次第です。

ペンと紙があれば、いつでも何処でも思いを現すことができるのですから、やはりペンと紙は偉大です。皆様も“自筆”を意識されては如何でしょうか。

センターニュースは現状維持に留まらず、編集委員会で常に新しいアイデアや企画を模索しておりますが、やはり組合員の方々の投稿なくしては成り立ちません。今後ともご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

(本田 記)